

神経内科の外来診療 医師と患者のクロストーク・第3版

北野邦孝 ● 著

千葉大学教授・神経内科学 桑原 聡

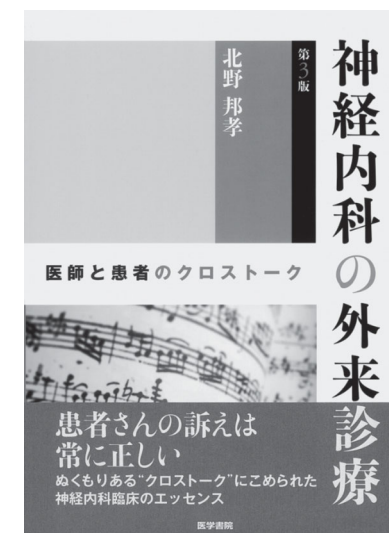
神経疾患の研究は1990年以後、分子遺伝学・生物学の時代に入り飛躍的に発展を遂げ、現在は分子標的治療、細胞治療の臨床応用が始まる直前の段階にきている。神経内科の臨床においても、各種疾患における診断・治療に関する膨大なエビデンスに基づき多くのガイドラインが構築されつつある。しかし、一線の神経疾患外来診療において最も重要なものは病歴に基づく適切な診断と治療に向けたオリエンテーションであり、これは普遍的であり今後も確固として変わらない。

北野邦孝先生による『神経内科の外来診療——医師と患者のクロストーク』は初版が2000年に出版されて大きな反響を呼んだ。わが国では先駆的であった神経内科専門クリニックからの非常に実践的な経験や哲学を含んだ内容に、多くの神経内科医は感動を覚えたものである。このたび第3版を迎えた本書では、さらにバージョンアップした神経内科外来診療におけるコンセプトが見事にまとめられている。

著者である北野先生は1992年に

松戸神経内科を開設される以前には、松戸市立病院神経内科部長として活躍されていた。幸運にも筆者は1986年に同院で研修し、北野先生から直接指導を受ける機会を持つことができた。この期間に北野先生の人間性と臨床能力の高さに憧れたことで神経内科臨床の魅力に取りつかれ、現在の自分があると思っている。特に外来診療を北野先生の隣で行うことができたことは大きな財産になった。初診の患者さんに笑顔であいさつし、問診が始まってから数分で診断と病状の説明が始まり、患者さんが非常に満足そうな表情で診察室を出ていく光景が今でも鮮やかに思い出される。本書の中に、医師にとっての診療は日常であるが、患者さんの受診は、ある種の決心をもって病院やクリニックを訪れる“非日常”下にあり、クロストークとは問診のもっと奥にある心の交流であるとのくだりがあるが、まさにそれを実践されていた。

神経内科は非常に多岐にわたる疾患・症状を対象とする分野であり、臨床医としての知識、応用、センス



が最も問われる分野である。本書では神経内科外来において最も頻度が高い頭痛、失神、めまい、しびれからクロストークの実際が記載され、さらに外来診療をほぼ網羅する各神経疾患について臨場感にあふれた記述が満載されている。この第3版を通読してみて、自分が今も外来や病棟回診で似た言葉を発していることに気付いた。不肖の弟子としてではあるが北野流クロストークの教えが染みついているためである。

さらに第3版では最新の治療、臨床疫学、ガイドラインがふんだんに書き加えられており、クロストークを楽しみながら実践的な知識が身につく構成になっている。神経内科の外来診療を実践されているすべての方々にとって、必携の書として診療に役立つ本書の出版に心から賛辞を表したいと思う。

A5 頁332 2013年

定価3,990円

(本体3,800円＋税5%)

[ISBN978-4-260-01769-5]

医学書院刊